②「コロナ禍のいじめ問題をどう考える」

池坊短期大学
副学長　桶谷　守

◇　令和３年８月現在、新型コロナウイルス感染者数が日本で１００万人を超える中、児童生徒のコロナ感染者数も１年間で２万６０００人余りになっている。一昨年度３月に学校が臨時休校を行い、６月から分散登校や短縮授業を行うようになり、児童生徒や保護者の「**感染に対する不安**」や「**感染防止対策下のストレス**」が高まった。また、学校特有の不安・ストレスも生じた。

具体的には・・・

- ・休校や進路に対する不安
- ・学習の遅れを取り戻すためのストレス
- ・コミュニケーションが制限されることへのストレス
- ・行事、部活動が制限されることへのストレス
- ・年度当初の学級集団づくりなどの集団形成ができなかった

等があげられる。

◎　感染者等に対する偏見や差別への対応

〇感染者、濃厚接触者とその家族、感染者の対策や治療にあたる医療従事者や社会機能の維持に当たる方（エッセンシャルワーカー）とその家族等に対する偏見や差別につながるような行為は、断じて許されない。

具体的な偏見や差別には・・・

- ・「コロナにかかっている」とからかわれた
- ・咳をしただけで周囲の子どもたちが避難する
- ・医療従事者やその家族に対する偏見や差別

等があげられる。

〇厚生労働省の資料によると、「新型コロナウイルス関連の差別や誹謗中傷を学校現場で見たり聞いたりしたことはあるか？」との質問に対し、

- ・咳、発熱、欠席者に対して「コロナだ！」という
- ・保護者の言動が差別や偏見を助長している
- ・地域社会や近隣住民からの差別や偏見
- ・ＰＣＲ検査を受ける＝新型コロナウイルス感染者と蔑視する

等があげられた。

◎　長崎県の学校教職員へのアンケート調査の分析

〇「臨時休業期間中から臨時休業明け直後の子どもたちの状況について当てはまるもの」の上位５つは

- ・生活のリズムが乱れた子どもがいた
- ・運動不足の子どもがいた
- ・学校生活への意欲が低下している子どもがいた
- ・学習や学力に不安を抱えている子どもがいた
- ・登校を苦痛に感じている子どもがいた

等があげられた。

〇「これからの学校教育についてあなたが特に不安を感じているもの」の上位５つは

・学校行事をどうするか ・学級、学校内で子どもたちの健康、安全をどう保持するか ・学校はますます多忙化していくのではないか ・子どもの中に感染者や濃厚接触者が出るのではないか ・学校のオンライン化に対応できるか

等があげられた。

↓

このような状況が教育現場の中にある

◎『なぜ子どもは「コロナいじめ」をするのか？』

〇**いじめ衝動**（いじめる側の子どもの心理）と**いじめターゲット**に**いじめ許容環境**がプラスされると**いじめが起こる**。いじめ衝動には、満たされない権力欲や傷つきやすい自己愛、人間関係の不安、わがまま、ストレス発散などがある。いじめ許容環境には、特にコロナ禍においては、コロナ感染者を排除しようとする大人社会の雰囲気があげられる。

◎「キモい」という言葉

〇１９９０年代以降、若者言葉として流行りだし、現在は日常語として使われている。この「**キモい**」という言葉は、差別や偏見、いじめのシーンにおいて使われることが多いが、この言葉や感情は、現代社会をネガティブな方向へと突き動かす巨大な動力源のひとつになっているのではないか。

そして、「キモい」という言葉は、単なる悪口というだけでなく、排除と迫害を正当化するような響きさえ帯びていると思われる。